

第 5 回 釧路川流域委員会 議事概要

日時 : 平成 15 年 10 月 15 日(水) 15:00～16:25
場所 : 釧路地方合同庁舎 共用第 1 会議室
出席者 : 一條昌幸委員、内島邦秀委員、門田功一委員、小磯修二委員長、佐竹直子委員、杉沢拓男委員、高山末吉委員、辻井達一委員、濱隆司委員、古屋接雄委員、伊東良孝委員、菅原澄委員(代理 福田企画課長)、徳永哲雄委員(代理 菅江環境対策課長)、錠者和三郎委員(代理 田中建設課長)
(以上 委員 14 名)

議事概要

1. 議題

1) 釧路川水系河川整備計画策定フロー

事務局から資料に基づき、釧路川水系河川整備計画策定フローについて以下の説明が行われ、委員から特に意見は無かった。

- ・ グランドデザインの検討は第 5 回流域委員会で完了をしたい。
- ・ 第 6 回流域委員会からは河川整備計画の策定に向け、川づくりのあり方について議論したい。
- ・ 河川整備基本方針の決定は、H16 年度の早い時期を予定している。

2) 釧路川流域の整備方針(グランドデザイン)

委員長からグランドデザインについて以下の説明が行われた。

- ・ 地域の声を河川行政に反映させることを目的にグループインタビューを実施した。アンケート調査も行なわれているが、これは、量の調査であるのに対し、グループインタビューは、住民意識を少し掘り下げて把握しようという調査である。調査対象者は、各自治体の推薦により、各地域と職業のバランスをとりながら 24 名を対象とした。私自身がインタビューとして PPGI 法により行った。今回の特徴をまとめてみると、流域区分ごとの差はなく、職業の属性により意識の類型がみられる傾向にあった。これら住民意見を整理分析してグランドデザイン案に反映させた。
- ・ 第 4 回流域委員会において、グランドデザインに対するイメージの統一性、具体性に欠けていたので、第 5 回流域委員会資料では、私と事務局でグランドデザインのとりまとめをおこなった。この際、関係の委員にも協力願った。
- ・ グランドデザインは長期の方向性を示すもので、グループインタビューを通して住民が感

じていることが3つの柱の決め手となった。1番目の「生命ある川」は、市民から自然を大切にしたいという意見が出ていたものである。2番目の「暮らしと自然との共生」は、生活や産業活動をしていくときに自然と共生しながら地域の長期的・安定的な発展が重要であること、また、3番目の「流域が一体となった川づくり」は、現行の枠組みを超えて、長期的には流域が一体となった川づくりの視点が必要であることから、これらを3つの柱をランドデザインとしてとりまとめた。

次に、事務局からグループインタビュー、地域資源評価、ランドデザイン案についての資料説明の後、各委員から下記の通り発言があった。

(委員)

第4回流域委員会では地域資源評価がどういう方向付けでランドデザインになるのかがよく判らなかつたが、今回は地域資源評価の位置づけや方向性がわかり易くとりまとめられている。

(委員)

JRでは、湿原を含め自然環境を活かした輸送を目指している。河川の蛇行や浸食、今年の8月増水など、JRと河川の関わりは深く、JRとしても今の自然をそのまま活かした形でやっていきたい。今回の案は、アンケート調査等も行って分りやすく取りまとめられている。

(委員)

酪農業は川と関わりがあり、川に対してやさしい考え方を持たなければならないと考えている。今回のランドデザインは、これも含め、よく取りまとめられている。

(委員)

今回示されたランドデザイン案の中で、特に「必ずしも従来の仕組みや枠組みにとられない、流域が一体となった川づくり」があり、注目した。今後のプラン作りに、住民の意見をこれまでの枠とは違う形で反映させていこうという決意の現れなのかという期待と自分自身の責任も感じている。

(委員)

前回より地域資源評価図は、感心して見ていた。しかし、ヘリから見た認識と資料の内容に違和感を覚えた。湿原は自然林に囲まれとあるが、ヘリでは豊かな自然環境が維持されているとは思えなかつた。また、流域の最上流部は自然豊か度とか、自然林が60%、人工林が30%とあるが、上から見た広葉樹林は密度が薄く、こんもりしていたのはカラマツ林で整備されていないのが目立っていた。この違いは地域資源評価図に阿寒川流域も含まれていることから、評価範囲の違いによってイメージと異なると思うので、この辺を厳密に見たほうがよいのではないか。

(委員長)

地域資源評価の対象を釧路川流域に限った整理分析は可能と思う。基本的な指摘というよりも、今後、現状認識をより正確に詰めていくための課題提起と受け止めたい。

(事務局)

ご指摘の通りであり、隣接地域を含めて流域をある程度広くとっている。ランドデザインの方針に影響を及ぼすかどうかは別にして、色々な形で考え直したい。

(委員)

今回のヘリ視察では、流域が自然という形よりも草地という状況であった。これは良い、悪いということではなく歴史的な経緯で進められてきたものであり、今後開発された現在の姿を自然に戻すという課題を先に解決してからでなければ、利用についてはうまく進まないのではないかと。

(委員)

基本的には結構であるが、確かに表現で一部修正する必要がある。湿原それ自身は豊かな生態系であるが、周辺の森林は豊かとは限らない。現況と課題で人工林を広葉樹林に置換するというのが記載されているので良いが、次回委員会以降、河川整備計画の策定に向けて、上流域、中流域、下流域における個別に具体的なものを加えていった方がよい。

(委員長)

ランドデザインの表現上の指摘については、個々に意見いただいて、それを踏まえながら修正していきたい。ランドデザインの作業はこれで終わりではなく、今後の河川計画につなげていく作業の中で、具体的なことも議論していきたい。

(委員)

今回提示されたランドデザイン案の基本的な方向性は、これで良いと思う。漁業ばかりでなく上流の森林の保全について支川を含め流域一体で考えて行くのは非常に良い。また、漁業資源でサケに固定された表現となっているが、シシャモが遡上するのは釧路川だけといっても良いほどであり、サケ・マス・シシャモという表現に替えて欲しい。

(委員)

教育者の立場から、最近の事故は大人も子供も殺伐としたものがあるが、自然は、子供達の心を育てる大きな力がある。幼児の段階から自然の中に入れていき、魚釣りや水遊びをするように育てていきたい。ヘリに乗って上空から眺めると思った以上に農業開発が進んでいることが判る。今後ランドデザインを踏まえ環境省の保全策と農水省の振興策がしっかり連携していく必要がある。アンケートについては、住民が次に何をやっていこうという声が多く出ており、これを進めるために官庁、経済団体、市町村、研究者などが行うべきものに分かれてきて、次の展開が楽しみである。また、農業の畜産廃棄物という表現は、有効活用とか適正運用などの表現に替えてほしい。

(委員)

今回提示されたランドデザイン案の基本的な方向性は、これで良いと思う。川があって、そこに人間が住むという歴史の中で開発が進められてきた。今、復元と保全で昔の環境に戻すのは大事なことであり、目指すべき方向は、本来、川を持つ力を取り戻す方向で良いと思う。農業の家畜糞尿が、川岸や達古武湖の近くにまで積まれているのを見た。達古武湖には釧路市の水源取水口があるので、今後河川整備計画で必要な対策が講じられるようにしてほしい。

(委員)

弟子屈町は流域の最上流部に位置し、源流部の屈斜路湖は自然が豊かであるが水質は汚染されている。防災面でも歴史があって今の川の姿になっている。今後自然に戻す仕組みも必要であり、流域が一体となり、きれいな水づくりとか河川の整備に努めるよう、河川整備計画に生かしていく必要がある。

(委員)

へりに乗って感じたのは流域には森林が少なく草地が多いので相当量の家畜糞尿が出るのではないかと思った。また、久著呂川では、水の道が無くなって一面水溜まり状態になって上流部の水が流れていない所があり、心配していた通りであった。なお、ランドデザイン案は、これで良いと思う。

(委員長)

今後この流域委員会が河川整備計画の検討を進めていく上で、流域がめざすべきランドデザイン案については、基本的に確認が得られた。なお、一部指摘のあった表現上の再整理を行う。

3) 第4回「釧路川流域委員会」での意見に対する検討方針

事務局から、第4回「釧路川流域委員会」での意見に対する検討方針について説明が行われた。

2. その他

事務局から台風10号(8月)、十勝沖地震(9月26日)による災害報告が行われた。

8月の台風10号では20年に1度の大雨だったが、釧路湿原の貯留機能が発揮されて河川の水位変化がゆったりとした形であったとともに、排水ポンプ車による内水排除の効果が大きかった。また、9月には震度6弱の十勝沖地震が発生し、一部堤防や護岸が被災したが、10年前の釧路沖地震以後は震災対策を行ってきたため、軽微な被災にとどめることができた。

3. 閉会